

今も続く【ともだち in 名取】との交流記

2016年3月11日、東日本大震災の日から丸5年...

2012年2月29日、あの日も閏年の日に、TIFA 正副理事長と広報委員の5名は、建物一つない、荒涼とした一面雪原の名取市閑上(ゆりあげ)地区に、果然と佇んでいました。

あの時お訪ねした仮設住宅は、まだそのままとか。街も仮設も、更に人の心は、復興にはまだまだ時間がかかるのでしょうか。

昨秋も、オーストラリアから来日されたイザベラ・ア・カペラのメンバーは、名取市を3度目の訪問。あちこちに盛り土されたとは言え、いまだ建物は見えない閑上の原野に佇んだのでした。でもあの閑上の朝

市は賑わい、メンバーはカナダから送られたという木製のステージでコンサート。地元の若者たちと共に歌い、お餅つきを楽しみました。この時も、TIFAが毎年支援する名取市国際交流協会【ともだち in 名取】のメンバーが、いろいろお世話くださいました。いつものように、CDの売り上げは東北支援に寄付されています。

名取市の日本語教室に通う外国人の多くは農家のお嫁さん達。震災時の外国人ゆえの苦労、問題への支援活動は、その後の大きな教訓となり、様々な活動に進展しています。何よりも、異国で心細いお嫁さん達の絆を、一層深めていると聞きました。

5年の重みを噛みしめて、東北の復興を更に心したいと思っています。(MIO)



ニュースレター増大号 VOL44 2016.2.15 発行

Takarazuka International Friendship Association

編集：(特)宝塚市国際交流協会 広報委員会



T I F A インフォメーション

事業のご案内

- ◎ 国際化や国際理解に関する資料・情報などの収集、交換、講演会、セミナーの開催
- ◎ 外国人来訪者向けのホームステイやホームビジットのシステムづくりと受け入れ
- ◎ 外国語の学習、翻訳、通訳・観光ガイドなどの活動
- ◎ 国際化、国際社会に対応する人材やリーダーの育成
- ◎ 外国人が住みやすい街づくり支援や生活相談
- ◎ 外国人市民や海外の都市との交流の実施
- ◎ 毎月発行のニュースレターの監修
- TIFA機関紙の発行

募集しています

- ◎ 会員を募集しています。どなたでも加入できます。
年会費 個人 2,000円 入会金不要
団体 8,000円
法人 12,000円
- ◎ 外国からのお客様を受け入れていただくためのホストファミリーを募集しています
- ◎ 次回のニュースレター45号への皆様の投稿をお待ちしております。ホームステイや海外での体験、身近な国際交流にまつわる出来事などどんどんお寄せ下さい。

—編集後記—

外資系企業勤務のため、英語でコミュニケーションすることに抵抗はありませんが、編集を通じて「多言語での子育て」には思いもよらない難しさがあることを知りました。こういうことに触れられるのもTIFA広報委員の役得か、と感じています。(JT)

今まで「爆買い」が日本経済への追い風であったが、一時的なブームに終わらせたくない。訪日客の目を地方観光に向かせたい。そのためにはもっと多言語の案内板や通訳の配置が必要なのでは? それこそ今号で取り上げた子供たちの素晴らしい活躍の場に思えてならない。(KF)

★ 編集委員 ★

石原美生子 内池滋
奥田啓子 加藤啓子
杉本和子 遠 敦子
寺本さなえ 德田潤
福家清美 森脇洋子
山本敬子



テーマ「不安定化・複雑化する世界と日本の対応—私の海外体験を踏まえて」

2015年12月12日、田邊隆一先生による国際理解セミナー(11頁参照)後の懇談会風景

目 次

変化する教育 多言語の社会づくり	2
ニコール 堀内・ジョージ プラクストン.....	2
多言語での子育て.....	5
外国にルーツを持つ子どもたち.....	6
ヌリア・シュミット エドワード・ヒルトン 周芷冰.....	8
世界の食と健康.....	11
国際理解セミナー 田邊隆一先生.....	13
TIFA インフォメーション.....	14

発行者 特定非営利活動法人 宝塚市国際交流協会 (TIFA)

〒665-0011 兵庫県宝塚市南口2丁目14番1-3号 宝塚市立国際・文化センター内
Tel : 0797-76-5917 Fax : 0797-76-5918 URL : <http://www.jttk.zaq.ne.jp/tifa/>
~無断転載を禁じます~

～変化する教育 多言語の社会づくり～

外国人が生活風景のあちらこちらでかなり目立つようになった日本。世界各地においても多国籍化がどんどん進んでいます。多言語社会では子供たちの教育はどこへ向かえばいいのでしょうか。教育に関しては、日本で教鞭をとっているスコットランドとオーストラリア出身の先生に提言をいただきました。

「外国にルーツを持つ子供たちの教育」の寄稿文に、TIFA 編集子から多くの共感が寄せられました。同時に海外で奮闘中の「多言語の子育て」レポートも載せています。最後に日本に住む中国、イギリス、ドイツの知人たちは、異なる国に溶け込むためには、その国の価値観や規範を受け入れたほうがいいのではと言っています。

日本と西洋の教育に関する比較

ニコール 堀内



日本に到着して 息子の日本語の会話学校の6段階目が始まろうとした頃に 私達はどのような教育制度をとれば 息子にも家族にとって必要であるかを決めなければなりません

でした。日本ではこどもが旅行したり地方の学校からの入学が、自由に出来ることに感銘をうけました。上級生が下級生の面倒を見ているのを見て素晴らしいことだと思いました。これは、こどもが旅行したり両親と一緒に過ごしていると決して学べない【自立と責任】についての偉大な教訓であると感じました。

私達は、日本の公立中学校と公立の国際高等学校を体験することができました。もう一つ他の文化を知ることは、いろいろなことがあります。集中して取り組んでいるうちに平気になってくるものです。

オーストラリアの自由な教育制度では、こども達が教室での討論や自由に質問や自分の考えを発表できるように仕向けています。このことは生徒達がお互いをより深く理解したり、強い決断力を養うには必要なことだと思います。このやり方を日本の学校にあてはめると先生方から様々な反応がありました。或る先生は、授業の邪魔になると答え 或る先生は問題をより深く探求出来るので有難いことだと答えました。

日本の【給食制度】については、こども達がバランスのとれた食事といろいろな新しい食物を食べるよい機会になります。オーストラリアではランチボックスに詰め

A comparison of Japanese and Western Education

Nicole Horiuchi

After arriving in Japan when my son was about to begin the 6th grade with only conversational Japanese we had to decide what kind of education system to pursue that would benefit both his educational needs and the practical requirements of our family.

We were particularly impressed with the freedom that children had when travelling to and from the local school. It was

wonderful to see the older children looking after the younger ones and it seemed a great lesson in independence and responsibility that he wouldn't be able to get by travelling to and from school daily with his parents. Since then we have been able to experience Japanese Junior High School and Public International High School. Studying in another culture comes with frustrations but to concentrate on these would diminish the overall positive events.

The liberal Australian system encourages children to participate in the classroom discussions and freely question ideas. We believe this helps the students more deeply understand each other and builds strong decision makers. This attitude applied in Japanese schools has had varied responses from teachers. Some finding it a distraction to the lesson and others grateful for the chance to further explore the topic.

The kyushoku system in Japan ensures that children get a balanced daily meal and the chance to try a variety of new foods. Whereas, in Australia many children have pre-packed snacks in their lunch boxes which can negatively affect classroom behavior and learning ability. The kyushoku system helps parents that work full time, and would be a beneficial system for Western schools to adopt. The Australian system emphasizes experimental learning or learning by doing and individualized study from a young age. This personalized way plays to the strengths of each child rather than concentrating on fixing their weaknesses. The downside of this is that some children may not be strong spellers or able to recite the times table by the time they finish school. The Japanese system rigorously uses rote learning therefore the basic skills of almost every child are strong. The disadvantages seem to be that forcing an individual into a set mold undermines innovation and creativity. The current system has made Japanese students adept at answering problems for which answers exist, but students are stumped by, or hesitant to answer questions on which they haven't been coached. To create future leaders adding western ways such as discussions and free thinking may engage and encourage creativity in students. Being more flexible could be advantageous for Japan, creating innovative and empathetic leaders to play an important role in the future of Japanese society.

Fortunately, after experiencing both Australian and Japanese schools, in my opinion (bearing in mind that over generalizing is dangerous), Japanese schools prepare extremely proficient, hard working and considerate individuals. Western schools are great at preparing students to actively participate in their learning and also to participate in the outside world.

(外国语コミュニケーション教室 英語講師 オーストラリア出身)

スコットランドと日本の学校

ジョージ・プラクストン



私は、スコットランドと日本の学校を比べるとかなり違っていると思います。スコットランドの州立中学校と、日本の公立中学校について話そうと思います。

大きな違いの一つは「始業時間」についてです。日本の学校は8時30分にはじまります。早過ぎるのでは? スコットランドでは9時15分まで始まりませんが、終わるのが遅くなります。スコットランドの学校は、月曜日から金曜日まで週末は学校はありません。

もう一つの違いは「学校給食」についてです。日本の生徒は教室で食べます。これはスコットランドでは考えられません。教室は勉強の場であり、食べたり休憩する所ではありません。自分の「お箸」を持って来るのは面白い違いです。スコットランドでは食堂で食べてもよいし、時間になれば学校を出て街で何かを買ったり、学校にパック詰のランチを持って来てもいいのです。大阪市の公立中学校の給食は、経費節減のため民営化されているのは残念なことです。生徒たちはその料理を嫌っています。「まずいなー!」というのが多くの生徒達の意見です。

私は、生徒達が毎年自分の教科書を買わねばならぬ

いのにおどろいています。スコットランドでは買う必要はありません。同じ教科書が年毎に教室にのこされます。年月がたつと 紙が黄色になります。宿題がでると生徒は学校が無料でくれるノートに問題をコピーしなければなりません。日本の親たちに毎年ピカピカの教科書を買わせるのは紙の無駄であり出版社をもうけさせるだけのようにおもえます。

おそらく一番大きな違いは「課外活動」(部活)の有用性と重要性についてです。日本の生徒は放課後広い範囲の興味ある活動を楽しめます。これはとても良いことだと思いますがあまりにも多くの時間が使われる所以宿題とか自習の時間がとれないことに驚いています。

多分、「教育とは何か?」の全体の思想がちがっているのです。親達は「塾」での勉強を請け負ってもらって充分任せそうにみえますが、PTAのようなものに巻き込まれています。スコットランドの中学校ではPTAはありませんし「参観日」もありません。日本の中学校は生徒達にとっては、打ち解けて、交流でき、楽しめる素晴らしい場所だと思います。(森脇洋子 訳)

School in Scotland and Japan

George Plaxton

I've noticed quite a difference between school in Scotland and school in Japan. I am talking about what we call state secondary school and what Japanese call "public junior high" school. One big difference for children is the starting time. Children start at 8:30am, which is much earlier! We usually don't start lessons until 9:15am. However, we finish later too. The school week in Scotland is from Monday to Friday and there is never any school at the weekend.

Another difference is school lunch, or what we call "school dinners". In Japan children eat in the classroom. This is unthinkable in Scotland. The classroom is strictly a place of study, not for eating or having a break. Bringing your own cutlery is an interesting difference. In Scotland, we have a choice of having school lunch in the "dinner hall", going home at lunch time, leaving the school ground and buying something in town, or bringing a packed lunch to school. It is also very regrettable that school lunches in Osaka junior high schools have been privatised to cut costs. Many children don't like the food. "It tastes disgusting" is a common opinion among many children I know.

I was surprised that children have to buy their own textbooks every year. We never had to buy any texts. The same textbooks remained in the class year after year. The paper turned yellow with age. For homework we had to copy the questions into our notebooks, which were provided free from the school. It seems a waste of paper and a money making exercise for book publishers to make parents buy glossy new textbooks every year.

Perhaps the most noticeable difference is the availability and importance of extra-curricular activities (bu-katsu). Japanese children can enjoy a wide range of interesting activities after school hours. This is very good, but I find it surprising that so much time is spent on them, and comparatively little time is given to things like homework or self study.

Perhaps the whole idea of what is education is very different. Parents seem happy enough to contract out the serious business of studying to private "jukus", but they are also very much involved in things like the PTA. There was no PTA at my secondary school, and nothing like "sankan bi". Japanese junior high school seems to be a quite a nice place for children to socialise and have fun. (外国语コミュニケーション教室、英語講師 スコットランド出身)

姉妹都市ウィーン市第9区（アルザグランド）だより

中田留美子（マインハルトプリンツ夫人）



マルチナ マイアール区長

昨年(2015年)は宝塚の皆様にお目にかかる機会がなく残念でしたが、お変わりなくお過ごしでしょうか?

昨年11月のウィーン市第9区の区長選挙では、マルチナマイアール(Martina Malyar)区長さんが再選されて、党も大きく議席を増やされました。以前区長さんにお会いした時は選挙に勝てるか全く自身がないとおっしゃっていましたので、良い結果で良かったです。宝塚を訪問されたアルザ在住のDoubek(デュベック)氏のグリーン党も躍進したようですが、区長選には敗北されたようです。

最近はテロの警戒がウィーンでもされていて、シュテファン寺院の前なども武装警官がたくさん出るなど以前のウィーンにはなかった光景です。不安の多い世の中でも人の心をなごませる音楽は本当に貴重だと感じています。

またお会して宝塚で音乐会ができます日を楽しみにしつつ、今年もどうぞよろしくお願ひ致します。(2016.1.1)



～変化する教育 多言語の社会づくり～

多言語での子育て



大月さやか

(ローター バイセル夫人)

国際結婚をしている夫婦にとって、「言葉」は常に大きなテーマです。私とドイツ人の夫はどちらも、お互いの国の言葉を話しますが、何しろ母国語ではないので、言葉の上達の為にと始めたのが、話す言葉を一日交代にすることでした。日本

語とドイツ語の替わり目は午前零時、ドイツ語の日にうっかり日本語を話しても一切理解しないふり・・・こんなルールがもう20年近く続いています。

夫が宝塚市の国際文化センターで働かせて頂いていた頃、長男が誕生。当然子供は日本語もドイツ語も母国語となるように育てたいと考えました。国際結婚をしていれば子供が自動的にバイリンガルに育つというものではありません。夫は子供とは必ずドイツ語で、私は必ず日本語で話す、というルールが加わりました。

その後私どもが出会ったオーストリアに戻り、長女、次女、次男が生まれましたが、それぞれの言葉で話しかける親のもとで、子供達は両方の言葉を母国語として話すように育っています。全員小学校からドイツ語と英語のバイリンガルの学校へ通っているので、三つ目の言葉に英語が加わり、更に複雑になっていますが、多民族混住の時代に生きる子供達には欠かせない素養だと考えています。

ウイーンでは4人に1人が外国人、帰化した人を含めると50%が外国の出ということもあり、複数の母国語を持つのは珍しくありませんが、小学校でも落第があり、わずか10歳で、将来、大学へ進むか職業人になるかのコース選択も求められます。そのような厳しい教育環境の中ですが、週に一度は日本語を話す子供の集まりに参加したり、日本の小学校にプチ留学するなど、日本の文化や言葉を身につけさせるよう努めています。

わざと私に日本訛りのドイツ語で受け答えするなどの反抗期も経て、現在、16歳、13歳、11歳、6歳になった子供達は四人四様、競技ダンス、テコンドー、体操、ビデオ作りと、各々得意分野を見つけて楽しんでいます。

多言語の環境で育つことが、多文化を理解する助けとなり、多くのことに興味を持つきっかけになっていくと私は考えています。将来、子ども達が旺盛な好奇心を持ったグローバルな人間に成長していくことを心から願っています (ロータさんはTIFAもと職員)】

～変化する教育 多言語の社会づくり～

「外国にルーツを持つ子どもたち」の教育とアイデンティティ：私の場合

外国にルーツを持つ子どもたちの背景はさまざまであり、置かれている状況も複雑です。それだけではなく、「在留外国人数」および「外国籍の児童・生徒数」に含まれない子どもたちもいます。例えば両親のどちらかが日本人であったために本人は日本国籍を持っているが様々な事情で他の国で育っていた場合、日本人として入国すると「在留外国人数」には含まれません。しかし実際の状況は外国籍の子どもたちと同じです。

また、一定期間を海外で暮らして帰国した日本国籍の子どもたちは「帰国生」とされます。文部科学省「学校基本調査」によると、2012年度は小・中・高で10,476人の帰国生がいます。帰国生の中には、うまく日本の学校生活に適応できなかったり、複雑な家庭事情のせいで落ち着いた環境を得られなかつたために一貫した学習を受けられなかつたりという状況で問題を抱えてしまう子どもたちもいます。何が正解かは分かりませんが、多文化に触れ、多様な教育のあり方を少し経験した私の場合が他人事ではない事を知って頂ければと思います。加藤啓子（広報委員）

英国ロンドンで幼児教育と5才から初等教育を受け、2年生になったばかりの娘はその年の7月に新学期が1月から始まる南半球の南アフリカ・ヨハネスブルグのユダヤ系の私立小学校に入学しました。入学許可のための面接は校長先生（ヘッドマスター）が自ら行い、そこで校長は面接結果で、いとも簡単に6才の娘は3年生に編入されました。編入されたクラスの平均年齢は8才で2学年飛び級という扱いでした。公用語は英語ですので、幸い、教育は英語で行われました。もう1つの公用語アフリカーンス語（オランダ語から派生した言語）、そしてヨハネスブルグに多く住んでいる黒人の部族が使っているSotho語の授業もありました。（ヘブライ語の授業もありましたが、外国人生徒には選択科目でした）

小・中学生の日本人学校もありましたが、現地を選んだのは英語圏から英語圏への移動で、言葉の問題がない事と教育方針が日本と似た評判の良い学校であったという2点からでしたが、親としては、日本語力をどう保持するかが最大の課題でした。学校での生活、友達との遊びは勿論、寝言までも生活の大半は英語の中、家庭では日本語を徹底することに務めなければなりませんでした。日本語の読み書きは日本からの通信教育に頼っていましたが、子どもにとっては苦痛以外の何ものでもなかつたようでした。涙ポロポロの自宅学習の日々が思い出されます。

その後、帰国して日本の学校に編入する時的小



学校の対応に、海外で経験しなかつた異文化理解の遅れを日本の教育現場で実感することになり本当にショックでした。面接に当たった学校関係者は日本語で話をしている娘を前に「日本語が話せますか？」に始まり、現地から在学証明書を持参しているにも拘らず、「学年を下げて編入しませんか？」との質問でした。30年も前の事ですので、教育現場の現状が改善されている事を願うばかりです。

30年の歳月を経て、娘は母親として、3ヶ国の国籍（父親と母親の国籍+出生地のアメリカ国籍）を持つ子どもの教育を選ぶ立場になりました。そして、5才になる孫は父母のどちらの国でもなく、出生地でもないヨーロッパのルクセンブルク大公国に在住、ヨーロピアンスクールで初等教育を受けています。そこに集まる子どもと親の国籍も言語も文化も様々で、クラスは12の各言語分野に分かれて教育が行われています。

ルクセンブルクでは仏語、独語、ルクセンブルク語が公用語として使用されているので、日常的には仏語が必要なため、年齢相応の4ヶ国語（2つの母語、英語、仏語）を使い分ける孫の教育は娘夫婦にとっては私の場合をはるかに超えた重大問題となっています。

孫がデビュタント（débutante）の年には世界のグローバル化は急激に変化し、2016年の祖父母の危惧は昔話になっているかもしれません。

～変化する教育 多言語の社会づくり～

声・声・声

- ◎ 様々なご体験をされたことがよくわかりました。いろいろと考えさせられますね。私の周りにも何人かおられます。第一家も帰国子女組。甥や姪は、結婚しましたが、夫々グローバルに生活しています。いいことも悪いことも生き方次第ですかしら□（S）
- ◎ 「涙ポロポローー」の異国での親子の壮絶さを感じる努力を読ませていただき、グローバル化の進む現在、苦労しながら多文化の中で暮らす子ども達が確実に増えしていくことを実感しました。（O）
- ◎ 力作を興味深く読ませていただきました。「自分の子供の教育」について特にいつかは日本に帰る可能性がある場合の「日本語の読み書き」を家庭で教えなければならない場合の涙ポロポロの親子の葛藤の場面が魅力的で具体的な例をあげてもう少し詳しく書いていただけたらと思いました。相変わらず帰国子女を受け入れる日本の学校側の態度が問題ですね。学校嫌いになったり、親子で苦しんでいる家庭の話もあとがたえません。私は遠い昔、小学校の1年生時から6年生のはじめまで父の会社の転勤で、アジアの国をめぐりました。言葉の問題はなかったのですが、兄の中学受験で留守家族は日本に帰ってきました。広い大陸で羽根をのばした自由な生活を楽しんだので、帰国後もとの学校にもどったのですが、窮屈な感じがしました。何十年たった今でも懐かしさで一杯です。中国や韓国のことを考える時、自然と相手の立場にたっての理解ができ、一味ちがつた見方ができる自分を大切にしたいとおもっています。（M）
- ◎ まだまだ真の国際化を実現するのは大変だと思いました。私も55年余り前に主人と共にヨーロッパに渡り、フランス・スイス・イタリアに住んだ経験がありますが、その当時は子供もいませんでしたので、学校の教育事情は知る由もありませんでした。日本人は珍しがられていましたし、現在の日本人が東南アジアなどの方々を（失礼ながら）、後進国を感じているのと同じくらい、日本人やアジア人などに対しては、同情的で親切にしてくれていたように思います。現在もなお、欧州でさえ学校教育はその様な事情と知りますと、まだまだ今後の（永遠の？）課題ですね。TIFAの国際交流の理念はどういうものか、あらためて考えてみると難しいですね。貴女のこの貴重な御経験を大切にされて、TIFAの国際交流に活かして下さいことを切に期待致しく存じます。有難うございました。（T）
- ◎ ひとごとではないと痛感しました。私の孫も今、韓国語習得のために、韓国の小学校に留学していますが、帰国のたびに、日本語の表現がまずくなつて読み書き、話し方はもちろん、考え方も韓国風になってきています。時々英語も混じつてきているようです。あちらのお母様のことを考えるとそれもよしかなと思つたりもしています。2016年には上の孫はやつと6歳になりますので、こんどは日本の小学校に入学させるようです。日本では、飛び級がありませんので、また1年生からやり直しです。もともと孫たちの両親は中国語で交際していたようですので、これからも家の中では、多言語が飛び交うことでしょう。孫たちの戸惑う心を受け止めるのが、私たちジジババの世代のように思っています。（F）
- ◎ 私も、感動をもって読ませていただきました。そして、もう少し具体的に突っ込んだお話を、もっと聞きたいと思いました。一見華やかに見える海外生活も、本当に子どもの教育問題は深いですね。特に言語を覚える年代の時はアイデンティティの問題。その人格形成に大きく作用するので、親には深刻なことでしょう。同じように、国際結婚した義妹は、まず両親がどちらの言葉で育てるか、ずいぶん悩んでいました。2か国語で生活するデメリットを考えたようです。その後の学校問題もずっとついて回ったようで、本当に深刻ですね。でも、彼らは今やしっかり成長し、立派に成人しています。母は、Mさんより更にさかのぼって、学校では英語で勉強し、遊びはスペイン語で、家族とは日本語、として育った元祖帰国子女のはしりと言えるでしょう。92歳の今でも難なく、どの言葉も話せるのを見ていると、皆様もそうであるように、やはり大きな財産です。但し、母は外国で大事な子供時代から思春期までを過ごしているので、その年代の複雑な日本語をあまり知らない。わびとか、さびとか…（><）そんな問題は確かにあります。ご存じのように、母はかなり外国人かもしれません（＾＾）。（I）

TIFA広報委員会メンバーには、多彩な経験を持つ人が多く、貴重な財産です。今や、孫の世代でこのような問題を抱える時代なり話の輪が広がります。多言語社会を生き抜くために、少しでも示唆になれば幸いです。

～変化する教育 多言語の社会づくり～

新しい視点

ヌリア シュミット



日本に来て1年が経ちドイツと日本の日常生活の違いにすいぶん慣れましたが、それでも日本文化の繊細さを日々発見しています。気付いたことをいくつかここで紹介したいと思います。

日本はとても居心地がよく、それはとりわけ私の出会った人たちが普通以上に親切な人たちであることによるところが大きいです。私にとって外国人として見知らぬ国に住むことは新しい体験でした。日本では誰に対しても基本的に信頼がおけでとても快適です。例えば差し出された釣銭をごまかされるかもしれないと思って確かめる必要はありません。私が思うに日本はとても正確に計算のできる世界でも数少ない国の一つでしょう。

日常の小さな色々なことがとても合理的で日常生活を快適にしています。いつでも両替できるATMや街角の自販機、考え方抜かれた包装などです。他には音の流れる信号やエスカレーター、曲がることを知らせるトラックや列車内のアナウンス…スーパー・マーケットでは新しい特売品を出しを知らせる曲が少なくとも5曲はあります。視覚障害者や疲れ切った労働者にはとても役立ちます。けれども絶え間なく続くこういった騒音は音楽家の耳には負担です。ドイツには騒音は環境公害の一つという考えがあります。日曜日の朝まだ静かな時にドイツでは教会の鐘が鳴って静寂が破られるので残念です。

Neue erspektiven

Nuria Schmid

Nach einem Jahr in Japan habe ich mich schon an viele Alltagsunterschiede zwischen Deutschland und Japan gewöhnt, trotzdem entdecke ich täglich neue Feinheiten der japanischen Kultur. Gerne möchte ich hier ein paar Beobachtungen mit Ihnen teilen.

Ich fühle mich in Japan sehr wohl und dies liegt vor allem an den überdurchschnittlich hilfsbereiten Menschen, denen ich hier begegne. Für mich ist es eine neue Situation als Ausländerin in einem fremden Land zu leben. Es ist für mich sehr angenehm, jedem Menschen hier ein Grundvertrauen schenken zu dürfen. Zum Beispiel wird das Wechselgeld jedem vorgezählt und man muss nicht selbst nachrechnen, ob man eventuell über das Ohr gehauen wurde. Japan ist meines Erachtens, eines der wenigen Länder der Welt in dem man so auf die Korrektheit der Menschen zählen kann.

Viele kleine Alltagsdinge sind extrem praktisch und erleichtern den Alltag sehr. Ich denke, an die Geldautomaten, die jederzeit Wechselgeld haben, an die Getränkeautomaten an jeder Straßenecke, durchdachte Verpackungen und vieles mehr.

Außerdem gibt es sehr viele akustische Signale, Rolltreppen, die um Achtung bitten, Lastwagen, die signalisieren,

日本では人々の調和が最優先されています。問題や生じうる葛藤は発生する前に、習慣的に回避されます。列車の正確さも大いにストレス軽減に役立っています。

大きな相違を感じるのは日本の生活では、建物内部の温度調節をしていることです。外は『暑い』か『寒い』一年の何週間かは『涼しい』で、日本の気候はとても気持ち良いです。ドイツは時には寒すぎます。だから人々は太陽が照り始めるすぐにオープンカフェや庭、バルコニーに出てきて食べたりパーティしたり飲んだりまた新鮮な空気を吸います。太陽は喜びを意味する人は暖かいのが好きです。もし夏にテラス席を作らないカフェがあつたらお客様が来ないために閉店しなければならないでしょう。

日本に非アジア人が珍しいことから私が人目を引くということは早くから気になりました。ドイツでは移民に出会いが今では日常的になっています。私も子ども時代から様々な国籍の友人を持っています。イスラエル、トルコ、中国、トーゴ、エチオピア、アルゼンチン、ペルー、イギリス、フランスそしてもちろん日本の人たち。これは私にとって大切なことです。自国にいると典型的なドイツ人ということを殆ど意識しませんが故郷を遠く離れて日本からドイツを見ると、どういう相違があるか母国が何をしているかに気が付きます。目下のところドイツはアイデンティティを強く保って自国の文化の値打ちを熟考せねばなりません。というのは多くの難民がドイツに来ますが、彼らがドイツに溶け込むためにはドイツ社会の価値観や規範の一部を受け入れるべきと私は思います。異なる文化の人々と接点を持つことは世界への新しい視点を開き人々の心を開拓しますしそれが豊かさです。TIFAは多様な活動をして宝塚でこれらを果たしています。(訳 北村)

dass sie abbiegen, Ansagen in Zügen... In Supermärkten gibt es mindestens fünf verschiedene Musikstücke, um die neuesten Sonderangebote anzukündigen. Für Blinde oder übermüdete Arbeiter kann dies sehr hilfreich sein, jedoch nehmen meine Musikerohren diesen permanenten Geräuschpegel als störend war. In Deutschland gibt es dafür den Begriff der akustischen Umweltverschmutzung. Ich vermisste die Stille eines Sonntagmorgens in Deutschland, an dem das Leben still steht und nur die Kirchenglocken läuten.

Die Harmonie zwischen den Menschen hat in Japan oberste Priorität. Probleme und mögliche Konfliktpunkte werden schon vor ihrem Entstehen durch genaue Angaben der Abläufe und Regeln vermieden. Dies empfinde ich als sehr angenehm und reduziert den Stress im Alltag enorm. Auch die Pünktlichkeit der Züge trägt maßgeblich dazu bei.

Ein großer Unterschied, den ich immer wieder feststelle, ist, dass sich das Leben in Japan hauptsächlich im klimatisierten Inneren der Gebäude abspielt. Draußen ist es „samui“ oder „atsui“, nur ein paar Wochen in Jahr „suzushii“. Das Klima in Japan finde ich sehr angenehm, in Deutschland ist es mir oft zu kalt. Dort zieht es die Leute deswegen, sobald die Sonne scheint, in Straßencafés, in den Garten oder auf den Balkon. Dort wird gegessen, gefeiert, sich gebräunt und „frische“ Luft getatmet. Sonne bedeutet Genuss und man liebt es schön warm. Ein Café, das im Sommer keine Tische draußen stehen hat, muss schon bald wegen mangelnder Kundschaft schließen.

Schon früh ist mir aufgefallen, dass ich als Ausländerin auffalle, da Nicht-Asiaten in Japan eine Seltenheit darstellen. In Deutschland ist es heutzutage alltäglich auf Schritt und Tritt Migranten zu treffen. Schon seit meiner Kindheit bin ich es gewöhnt, Menschen mit unterschiedlichsten Nationalitäten meine Freunde zu nennen: Israelis, Türken, Chinesen, Togolesen und Ethiopier, Argentinier und Peruaner, Engländer, Franzosen und natürlich Japaner. Ich habe das schon immer geschätzt. Oft war es mir in meinem eigenen Land gar nicht bewusst was typisch deutsch ist. Erst wenn man die Heimat verlässt und von einem entfernten Land wie Japan nach Deutschland schauen kann, merkt man welche Unterschiede es gibt und was das Heimatland besonders macht. Momentan muss sich Deutschland stark mit seiner Identität beschäftigen und überlegen welche Werte zu unserer Kultur gehören. Da viele Flüchtlinge nach Deutschland kommen, sollten sie meiner Meinung nach, einen Teil dieser Werte und Normen übernehmen um sich im Land zu integrieren.

Kontakt mit Menschen unterschiedlicher Kulturen eröffnet neue Blickwinkel auf die Welt, schärft die Offenheit der Menschen und ist immer eine Bereicherung. TIFA leistet großartige Arbeit dabei, dies in Takarazuka umzusetzen. Ein großes Dankeschön!

イギリスと日本との風習の違い

エドワード ヒルトン

私は3年前日本に来て、イギリスと日本の風習の違いにけっこう慣れましたと思うですが、今でも色んな事が面白いと思います。①週末なのに、中学生や高校生の制服を着てる生徒が多いです！イギリスの学生は絶対着たくない、あんまり見ないと思います！②日本では、バスや電車待ちの人がキレイな線で並んでいます。イギリスではそんなにやってないし、ホームに電車が止まる所と書いてないので乗りにくいです。自分の事しか考えていない。③バスや電車の車内で携帯で話すのはマナーが悪くてめっちゃいい事でないと思います。イギリスでは誰かの会話を聞きたくない！そして日本では、信号が多過ぎです。少し運転がしにくいけれども、④また、日本では人前で鼻をかむのは少し良くないと教えて貰いました。けれども、イギリス人はいつもハンカチや鼻紙で鼻をかんでいますから、ちょっと慣れにくかったです。お父さんは日本来た時に、電車の車内で音が大きくて鼻をかんだら、見る人



が多かった。めっちゃ恥ずかしかったです。⑤日本でチップがだいたいダメです。レストランとか、タクシーとか、バーとか、イギリスのサービス料金が最近12.5%になりましたが、レストランで時々食事が不味いのに、レストラン員はチップを待っています。面白いですね！

私は今兵庫芸文センター(PAC)の4年目になるんですが、今までツアーの時に日本の美しい所を見るチャンスが多かったです。演奏会の総仕上げは、いっぱいあるんですけど、一番良い時が今年1月のマーラー交響曲第2番の演奏会でした。その時、阪神大震災の20周年のためのコンサートで、すごくパワフルで感情的な演奏会になりました。これからもPACまで聞きにきて下さい、これからも宜しくお願い致します。以上です。

日本文学からの異文化の理解

周 芷冰（シュウ シヒョウ）

私は中国の遼寧省（りょうねいしょう）から来た留学生である。現在は関西学院大学大学院の文学研究科に所属している。私は幼少期から世界文学に関心を持っていた。特に日本文学を研究することはその頃からの願望であった。学部3年生の時、学校の交流生として、日本に留学し、本格的に日本文学を学び始めた。夏目漱石、森鷗外らの小説を数多く読み、その中で、一番感動したのは芥川龍之介である。

芥川文学には、中国と関わりの深い作品が数多くある。異国情緒溢れる「杜子春」や「南京の基督」、毀譽褒貶（きよほへん）相半ばする中国紀行文『支那游記』（しなゆうき）、そして、戦争・時代の問題が内包される「將軍」、「湖南の扇」などの作品が挙げられる。これらの作品は外国人が日本語、日本文学を勉強するた



芥川文学碑の前で

めの教材として最適だと思われる。また、日中両国の相互理解への架け橋にもなれると考えている。

一例として、芥川の『支那游記』を挙げてみよう。『支那游記』には、一見すれば、中国に対するマイナスの表現が散見されている。ただし、彼は今関天彭（いまぜきてんぽう 中国研究家・漢詩人）の「休言竟是人家國。我亦書生好感時」という句を引用し、当時の中国を憂慮し、風景の荒廃や文化の没落を嘆く心情をも表した。そこに見られる同時代の中国と中国人への真摯な眼差しがあることは間違いない。

この例をとっても明らかのように、中国、日本の両国に避けがたく存在する距離が問題視されている今日にあってこそ、芥川文学、大きく言えば日本文学を中国において伝えるという行為は、一般的教養としては勿論のこと、ひいては日中間に横たわる溝を埋めることに繋がるものと確信している。

今日に至って、このような異国文化を理解する目が必要だと思われる。マスコミの宣伝を通して、その裏にある両国民の本当の気持ちを理解することも大事だと考えている。民間の交流から始め、両国の相互理解を深めようとする意義のあることである。今までの日本文学の研究から得られた両国の異文化理解の精神を今後の日中友好にも役立てられたら、非常に嬉しく思う。（周芷冰さんはTIFAが主催する語学教室の生徒です）

日本国籍があっても、日本語が母語であるとは限らない

日本では現在、累積で50万人以上の外国人が日本国籍を得ています。日本国籍を取得する人は多様化していて、1980年代後半からは、日本で暮らすニューカマーが急速に増えて、国際結婚で日本人と外国人の間に生まれた「ダブル」と呼ばれる子供がとくに増えています。現在では30組に1組が国際結婚です。ニューカマーの増加に伴って日本語の指導が必要な児童や生徒たちは、その中には帰国子女もいて、日本国籍を取得した外国人や、「ダブル」の子などがあります。日本国籍があることと、日本語が母語であるとは限らないのです。日本人が多様化しているのです。

外国人は、定住化となると母国の生活を日本でも楽しみたくなり、それを支える外国人向けの施設が生まれ、イベントも、かつては外国の文化に触るために日本人が主催する【国際交流イベント】が主流でしたが、今は外国人が母国の行事を日本で楽しむ【国際交流イベント】が増えています。多様な宗教を持つ外国人が日本で暮らすようになり、イスラムの人たちが暮らす街には、今まで見られなかったモスクやハラールフード店などがあります。

日本の学校では、日本人教育をすることが強くて、異なる国の子がなじみにくく、いじめが起き、時には学校の中に居場所がなくなることがあります。けれども、外国人ルーツの子どもが多く通う学校では、子どもたちの母語で掲示したり、多様なルーツを持つ子どもがいることを伝えるため多くの取り組みをしています。またそれらの人々が住む地域では、みかける表示も多言語化して、外国人観光客向けではなくて、生活している人に分かる言葉で伝えるための努力をしています。

国勢調査の言語も、1985年までは英語による調査だけだったのですが、90年以降は多言語化し2010年から27言語となっています。日本語を母語としない人がいることを前提に調査をしているのです。しかし多様化しているとはいえ、日本の人口における外国人の比率は1.7%程度なので、絶対的に日本人が多いので、状況がなかなか見えにくいのも事実です。これからは、日本人だけを前提にして日本語だけで様々な制度をつくってはいけない時代、まさに変化していく社会を知って対応する時代に入ったのです。（KF）

～国際理解講演会「世界の食と健康」～

講座部会 木村一枝

今、8回の講演を振り返ってみると、あらためて、食は文化であるということがわかる。海や山の幸を採取することに始まり、作物を育て、調理して食卓にのせるまで、その土地の気候風土や生活環境に合った食物、調理法が生まれた。その国人びとにとて最も日常的な食べものであり、健康を育んできた基本的な食事。それが現在までの長い間にわたって受け継がれ、独自の食文化をつくりあげてきたのである。こうして、世界じゅうでこれほど豊かなバリエーションを見せることになったのであろう。国際理解の一つの窓口として、食と健康のあり方を通してさまざまな国の人々を知ることができたのは、たいへん有意義であった。毎回30名を越す参加者も、興味深く、楽しく聞いていただけたのではないかと思っている。

広報委員会講座部会（元講座委員会）が企画、「世界の食と健康」をコンセプトに2014年6月に第1回を開始した講演会は、2015年11月に第8回を迎えた。これまでの講演を振り返ると次のとおりである。

第1回「奇跡の国スリランカ 豊かな食材と伝統的医療に触れてみよう」	池本 ニルミニ講師
第2回「悠久の国トルコ 食文化と健康志向はヨーグルトから」	トプラマオール A キャーミル講師
第3回「家族愛の国イタリア 健康は楽しい食事から」	アレッサンドラ コルフィアス講師
第4回「はるかなる大地ロシア 伝統と自然志向の食と健康」	扇 エリザベータ講師
第5回「自然あふれている国ルーマニア 日常の食と健康生活」	大佐古 シモナ講師
第6回「ウイスキーの故郷スコットランド 日常の食と健康生活」	河合 リンゼイ講師
第7回「南半球の高福祉国ニュージーランド ゆとりがはぐくむ健康生活」	松沼 直治講師
第8回「お菓子とビールの本場ドイツ 美味しい旅」	相原 恵子講師

約2か月に一度開催してきたことになる。第1回から第6回までの講師はそれぞれの国で生まれ育った、いわゆるネイティブの方々ばかりだが、第7回の松沼氏は、農業と酪農を学びにニュージーランドに留学し、移住もされた方。第8回の相原氏も、長いドイツ滞在経験をお持ちの方である。

つまり、みなさんそれぞれの国の食べもので大きくなり、健康的な生活を送ってこられ、現在は日本で食に関する仕事に就いておられたり、大いに関心を持っておられる方々である。各講演を要約してみると、

インド洋の島国スリランカは、スパイスとハーブの国。それらが人びとの豊かな食生活と健康を支えている。ハーブ類は、5000年前からのアーユルヴェーダという伝統的医療にも使われて、その奥深い施術方法は新しい医療として見直されている。右は、講師の池本ニルミニさん。スリランカ・コロンボ出身。英語教師。大阪在住。



東洋と西洋の交流地点トルコは、ヨーグルトの消費量が世界一。その語源がトルコ語の「ヨーウルト」であることからもわかるように、昔からトルコの人びとの食と健康の基礎となって、現在多くの料理に使われている。左は、講師のT. キャーミルさん。トルコ文化協会会長。大阪天満橋在住。



イタリアは、家族や友人たちと一緒にいることが幸せという国。家族や友人たちと「何を食べるかではなく、どのように楽しんで食べるか」が健康のもとだという。受け継がれてきた地産地消の食生活を、現代人は見直すことが大切と力説され共感を呼んでいた。

右は、講師のアレッサン德拉さん。ミラノ出身。バヴィア大学卒。大阪在住



ロシアでは、豊かな森と厳しい寒さのなかから、そして各家庭のペーチカとダーチャという設備から、すばらしい知恵を生かした料理が作られてきた。その伝統と自然の恵みを見直すことが、現代人の健康維持につながると考えられている。

左は、講師のエリザヴェータさん。サンクトペテルブルク出身。同名の大学卒。神戸在住。

さまざまな文化の交差点**ルーマニア**は、食もさまざまな国や文化の影響を受けてきた。農業中心の生活で、人びとの健康は家庭での日常の食事に支えられている。一方、宗教行事であるお祭りの時に作られる特別な料理は、今もなお大切に受け継がれている。

右は、講師の大佐古シモナさん。ネアムツ出身。ブカレストヒペリオン大学卒。



スコットランドといえばウィスキーの故郷。厳しい自然の暮らしのなかで、風邪の予防をはじめ薬用にも使われて、まさに健康と元気のもととなっている。

左は、講師のリンゼイ・カワイ(河合鈴世)さん。スコットランドグラスゴー出身。英国スチーリング大学卒。



南半球の国**ニュージーランド**は、国民の幸福度が毎年世界ランクの上位に位置する国。そうした恵まれた生活環境と、自然がもたらす豊かな食材が人びとの健康を育んでいる。はちみつの消費量は世界一で、特産のマヌカハニーは薬用にも広く用いられている。

右は、講師の松沼 直治さん。大阪箕面市出身。宝塚市湯本町に「キウイハウス」開業中。



お菓子とビールの本場**ドイツ**では、マイスターと呼ばれる専門家やビール純粋令によって、材料や製法の伝統と品質が厳しく守られている。家庭でも作られる日常的なお菓子、宗教行事やお祭に作られる特別なお菓子、そして、国内1350もの醸造所で製造されるその地ならでは、各醸造所ならではのビールと郷土料理が、ドイツの人びとの食生活を豊かにしている。

左は、講師の相原恭子さん。慶應大学文学部卒。作家・写真家として活躍中。



講演後の
懇談交流会風景

TIFA 国際理解セミナー

講師 田邊隆一先生

「不安定化、複雑化する世界と日本の対応」—私の海外体験を踏まえて

表題の講演会が、2015年12月12日、宝塚市立国・文センターにおいて開催。外交官として40年間にわたり、ヨーロッパの主要国（ドイツ、オーストリア、ポーランドなど）、サウジアラビア、アジア（インド、アフガニスタンなど）の大使【駐箚：チュウサ】として、ベルリンの壁崩壊、湾岸戦争、ユーゴスラビアの政治解体など、現代世界史上の大事件に立ち向かわれた貴重で豊富な体験を踏まえて話されました。又、文化という視点からは、文化に優劣なくお互いに言葉を学びあう努力を示す事はその国の文化に敬意を示す事であるし、地球儀のように世界地図を方角を変えて見る事も大切であるといわれました。人口問題では現在のドイツ、フランスを見ていると人口減少を案じ、労働力不足などで外国から人材をいれているが、その後が混乱しているのを見ると、日本の文化を失わないためには、単純労働は口ボットにさせたらよいなど、臨場感あふれるお話しが印象的でした。又、ベルリンの壁の破片や実際使われたガスマスクも見せて頂きました。ますます世界情勢は不安定化、複雑化して、日本の対応に対してこれでよいのか？という不安の声があがっています。世界では日本の国、日本人をどのように評価しているか定かではありませんが、国内では近隣国家との軋轢や国内メディアのせいで正確な情報が伝わっていないようです。（YK・AT）

以下は参加者の感想です

** 普段はなかなかグローバルな視点からの「正論」に触れる機会に恵まれないため、あらためて思考の軸を正されたように感じています。小生は外資系企業で働いており、電話会議等の折に片言でも現地の言葉で挨拶すると、同僚達が喜ぶのです。「現地語での着任ご挨拶」は、本当に素晴らしいですね。戦争は、新聞やテレビのニュースで見聞きする遠くの他の国で起こっていることを感じていましたが、田邊先生が体験されたお話を聞き、戦争は決して「他人事ではない」ことを再認識いたしました。また、世界の中には国際的なルールを守らない国があること、そしてその国々に対しても現実的な対応をするためには、視野を広く保ち、広範な情報から適切に判断できる力をつけなければいけない、と強く感じました。（TIFA会員 男性JT）

** 久しぶりに地球を俯瞰したような講演を聴いて、視野がグワッと広がったよ。日頃のほほんとして平和ボケしてたらあかんなあと思った。あちこちで起きている混迷は、かならずわしらに迫ってくるから、もっと本気で見守らあかんね。いい勉強させてもらった（市内建設業経営者：70代）

** 世界の不安定化、複雑化する構造変化を 個人の力の増大や多極化する権力の変化などが原因であると説明され、まさに「世界の歴史は紛争の歴史である」（先生の言葉）ことを実際にその現場に赴かれたご経験で話され、臨場感のあるお話して大変印象的でした。2015年は戦争終結70周年の節目の年で、私たち一人ひとりが日本を取り巻く世界の情勢をしっかりと勉強して、史実や外交の現状を理解することが大切であると痛感しました。機会があれば、又シリーズで勉強させていただきたいです。（TIFA会員 女性KO）

** 今回のTIFA国際理解セミナーは、長年に亘って外交官として活躍してこられた田邊隆一氏によるご講演であった。本講演のほぼ1ヶ月前にはパリでテロ事件があり、ヨーロッパの難民問題、尖閣諸島を巡る日中の緊張など、世界情勢は益々複雑化、不安定化を増しているように見える。そのような折に、コソボ紛争後のセルビア・モンテネグロや、現在も不安定な情勢下にあるアフガニスタンなどで、日本外交の前面に立ってこられた先生の臨場感溢れるお話や、外交の舞台裏のお話まで拝聴することができたことは幸いであった。今回は、まさに時宜を得たご講演であったと言えよう。（TIFA会員 男性SN）

田邊隆一先生から一言いただきました

皆さんに熱心に講演を聞いて頂き大変嬉しく思います。貴重な機会を頂いたことを有難く感じています。世界では日本及び日本人は高く評価され尊敬もされていますが、国内では近隣国の影響と国内メディアのせいできちんと伝わっていません。退官後も一人でも多くの方々に世界の状況、私の経験などについてお伝えすることが使命の一つと感じております。